カルロタコ、食べますか？

玉元　清

タコを食べると亡くなった人に会える、という。そんな小説のネタのような話を、田村美穂（たむらみほ）は、たまたま開いたネットの投稿記事で見つけた。はやりのフェイクだろうと思いながらも、美穂は、なぜかその記事が気になって最後まで目を通した。

南方に兄妹島（きょうだいじま）という島があって、そこにメキシコ人夫婦のカルロとクララの『カルロタコ』という店がある。カルロが作るタコがカルロタコで、クララが「カルロタコ、食べますか？」と注文を取る。そして、そのカルロタコを食べると亡くなった人に会うことができる。噂を聞きつけて客はカルロタコを注文するが、カルロとクララは、いろいろな具材のタコは作っても、カルロタコは、一日に一人分、二個しか作らない。

投稿者は四十代のときに夫を亡くされた方だった。末期癌が見つかって急逝した夫に、当時は気持ちの動揺と治療に追われて言えなかった〈愛している〉の言葉を伝えたい、ということだった。そして、カルロタコを食べて夫に会い、〈愛している〉の言葉を繰り返し伝えて、生前予定していたトリニダード・トバゴへの旅行までも、迷子にならないようにおそろいの赤い帽子を被って楽しんだ、と書いてあった。その上で、律儀にも、タコとはタコスのことで、メキシコ料理のタコがアメリカに渡ってタコスに名前を変えた、という注釈までつけてあった。内容はフェイクっぽいが、投稿した方の人柄を文面から想像すると、これは本当の話かもしれない。でも、たとえフェイクでも、このような話なら楽しい。

美穂は、小説を何冊か読んだような気分になって、就寝前の日課として、各地の花卉卸（おろし）市場（じょう）の動向チェックと情報収集のために開いているパソコンを閉じた。

美穂の一日は朝が早い。早朝に、ホロの付いた軽トラックで父が経営する数か所の花卉農園を回る。そして、三つの店舗で販売する花を調達する。生け花教室がある日は花卉卸市場に寄ることもあるが、きょうは寄らなくていい。アジサイ、バラ、ラベンダー、マリーゴールドなどの季節の花をトラックに積んで一旦家に戻る。そして、手早く朝食の支度をして夫の陽介（ようすけ）、娘の陽菜（ひな）と朝食を摂る。一年生の陽菜は、陽介が車で学校近くまで送ってくれる。二人を送り出してからすぐに三店舗に花を届ける。シャッターを開けて店内に花を運ぶ。お店での花の管理は十時に出勤する店長とスタッフの仕事になる。それから家に帰り、午前中は家事に充てる。午後からは、農園に行って鉢物や球根、花壇用苗などを選定したり、店舗に寄って、売れ筋商品や売れ残り商品のチェック、イベントなどの情報交換、時には得意先訪問をしたりする。美穂は今年三十四歳になるが、結婚前から十年近く

このような生活を続けてきた。仕事は楽しいが結構忙しい。それで、毎日のルーティンワークの中で、投稿記事の兄妹島とカルロタコのことはすっかり忘れていた。

ところが、夕食の席で、食事を終えた陽菜から思わぬ話が出てきた。

「ヒナ、〈赤〉という漢字書けるよ」

「ほう、すごいな～。どう書くの？」

隣に座っている陽介が応え、向かいに座っている美穂も同調して二人で大げさに身を乗り出した。

「書いて見せるね」

陽菜は箸を逆さにして鉛筆のように握り、得意げにテーブルの上に〈赤〉と書いた。

「わ～すごい！」

陽介と美穂は同時に拍手をした。

「あのね、二年生で習う〈羽〉という漢字も、三年で習う〈根〉という漢字もヒナ書けるよ。先生から教わった」

陽菜の担任は五十代の浅井久美（あさいくみ）先生で、十

年ほど前にご主人を亡くされたと何かの会合で聞いた記憶がある。教え方が実に巧みで、いつも楽しそうに子供たちを指導する。今回も、教科書に〈赤〉という漢字が出たところで、〈羽〉と〈根〉を二年生、三年生で習う漢字として同時に教え、子供たちに自信を持たせながら、『赤羽根（あかばね）』という学校の名前が書けるようにしている。

「一年生なのに、もう二年生三年生で習う漢字も書けるんだ」

美穂はまた大げさに感心する。

「あのね、ヒナたちの学校は赤い羽根の学校で、赤羽根小学校でしょう。そしたら、南の島には赤い鳥の島もあるんだってよ」

「赤い鳥の島？」

今度は陽介が大げさに応える。

「そうだよ。浅井先生は旅行したこともあるって。ホントはキョウダイジマだけど、赤い鳥がいっぱい飛んでいるから、赤い鳥の島になったって。ヒナも赤い鳥の島に旅行して、

赤い鳥をいっぱい見たいなァ」

「そうだね。旅行したいね」

美穂は陽菜の言葉に軽く応えながら、赤い鳥の島、キョウダイジマを反芻（はんすう）した。もしかして兄妹島？　投稿記事が蘇った。

「小笠原諸島に父島母島があるのは有名だが、世の中には兄弟島もあるんだ。まるで家族だなぁ……しかし、ヒナはすごい」

陽介は独り言のように言った後、陽菜の頬を両手で挟んで優しく揺すった。

美穂は時間が経つのをもどかしく感じながら就寝前を待ち、パソコンで〈キョウダイジマ〉を検索した。

兄妹島。南海にあるK島の離れ小島。島の北側に標高八十メートルのテダ山があり、K島側からは小さな富士山のように見える。地元では小島富士と呼んでいる。山は森林になって、島の固有種の火の鳥が生息している。兄妹島の別称を『赤い鳥の島』というのはこの全身真っ赤な火の鳥に由来する。島の中央

にはンタ池という名前の大きな池がある。昔は海と繋がっていたが、長い年月の間に入口部分に土砂が堆積して独立した池になった。島の周囲は約九キロメートル。面積は約三平方キロメートル。島はトウモロコシの栽培が盛んで、特に島の特産である白トウモロコシは甘くて美味しい。昔々、K島で戦があった。兄と妹は戦から逃げて海に飛び込み無人島に流れ着いた。やがて兄と妹は夫婦になり、土地を開墾して穀物を植え子孫を増やして島を繁栄させた。それを見ていた天上の神様がその島を『兄妹島（きょうだいじま）』と名付けた。島の人口は一九八〇年代までは三百五十人前後だったが、それ以降激減して、現在では人口八名で戸数五戸である。K島と兄妹島には千五百メートルの兄妹島大橋が架かっている。――

美穂は、ストリートビューを開いて見た。カルロタコのお店までは行けた。視界を上にスクロールして三六〇度回転させると、周りは一面のトウモロコシ畑だった。音のない画

面から、トウモロコシを揺らす風の音がサワサワと聞こえるようだった。突然、兄妹島に行ってみよう、という得体のしれない強い感情が美穂に湧いてきた。あの投稿記事は、もしかすると手の込んだ兄妹島への招待状かもしれない。そう思った後、美穂は、投稿記事は浅井先生かも、とちらっと思った。

庭の花壇の百合の香が夜の静寂（しじま）をぬっていつもよりも漂ってくる。今夜は雨かもしれない。愛知県も梅雨に入った。

美穂はハウスでの作業の合間に旅行のことを母親の栄子（えいこ）に相談した。すると栄子は、

「コロナもあるし仕事も休むわけにはいかないし、家族全員ではちょっと無理よ。陽介さんとも相談して、農園開業三十周年の祝いも兼ねてお父さんを誘ってちょうだい。費用はお母さんが持つから。お父さんは、陽菜ちゃんが一緒なら決して嫌とは言わないからね。実はね、この頃お父さん、なんか疲れている

ような気がしていたの。急にイライラするし。この三十年間の仕事中心の生活のツケが溜まっているかも。陽菜ちゃんが一緒なら、お父さんもいい気分転換になるわ」

と応えた。

陽介に相談すると、

「赤い鳥ウォッチング旅行か。いいね。陽菜喜ぶなぁ。大賛成。でも僕は残るよ。お義母(かあ)さんの言うとおりお義父(とう)さんを休ませたいのに、僕も一緒となると、お義父(とう)さんは仕事が気になって旅行どころではなくなる」

と応えた。

父の誠(まこと)に旅行のことを切り出すと最初は気のない返事だった。ところが、陽菜が赤い鳥を見たがっていることと、目的の場所がK島の兄妹島という南海の島であることを伝え、ネットの投稿記事をプリントアウトして見せると、ようやくその気になった。それで、旅行は、誠、美穂、陽菜の三人になった。

旅行することが決まると、美穂は、カルロ

タコに予約のための手紙を書いた。電話番号が分からないので手紙に頼らざるを得ない。手紙には、予約できる日時をご指示くださいということと、父と娘と三名で行くこと、娘が赤い鳥を見たがっていることを書き、予約日時を指定してもらうための返信用のはがきを同封した。住所は分からないので、K島市兄妹島カルロタコにした。五戸の島だからこれでも届くはず。すると日を置かずにクララから返事が来た。それで、指定日どおりの八月の旅行となった。陽菜は夏休みだし、この時期は、誠が経営する花卉農園も比較的暇で誠にも都合が良かった。

美穂が栄子から聞いた話では、誠は、大学を卒業すると不動産関連の会社に就職した。ところが、六年ほど勤めて、美穂が二歳のときにいきなり会社を退職した。そして、花卉農園でアルバイトを始めた。運よくアルバイト期間中に大阪で『一九九〇年、国際花と緑の博覧会』が開催され、バイト先から三週間

ほど派遣されて、世界の花卉事情も学んだ。そして、一年近いバイトを経て、自ら花卉農園を運営するようになった。しかし、退職の理由も転職の理由も栄子には語らず、栄子もまた問うこともなかった。

栄子に相談するようになったのは花卉農園業を始めることになってからで、まず、用地の相談があった。農地が広範囲にあり実家から近く地価が手ごろ、というのが用地の取得条件で、それに合致したのが渥美半島だった。用地を選定すると、誠は金融機関との交渉を手際よく済ませ滞りなく用地を取得した。前職の不動産業の経験が活きた。そして、いよいよ花卉農園開業ということになって、住まいを、名古屋から渥美半島に移した。

最初は三千坪ほどのハウスから始めた。それから得意先を徐々に増やし、それに伴い規模を拡張した。誠の一所懸命で丁寧な仕事ぶりが得意先から信頼された。花卉農家に転じた後に二人の男の子を授かり、子供に手がか

からなくなると、栄子も、耕耘機（こうううんき）での土作りから始めて、収穫、出荷の一切の業務を手伝った。そして今では、規模も業績も、近隣では一番の花卉農園事業者になった。数か所にそれぞれに数十棟のハウスがあり、それぞれのハウスを、美穂の二人の弟と陽介が責任管理していた。ハウスは、盆栽ものを除いて、切り花、鉢物、球根、花壇用の苗となんでも揃っている。そのハウスがあるから、美穂の三店舗も、原価に近い値段で花を仕入れることができて経営が成り立っている。

美穂は、これまでに何度か誠と栄子と海外旅行をしている。オランダには数回行った。それからドイツ、中国、シンガポール、タイなど数か国を旅した。国際的な園芸展覧会に合わせた旅行だったが、誠にとっては栄子の慰労を兼ねていた。そして、そのときはいつも美穂が一緒だった。誠は、二人の弟には厳しい父親になったりしたが、美穂には常に淡々と接した。しかし、淡々とした接し方の

中に、美穂は、大事に見守られている父親からの愛を子供の頃から感じていた。

「じっちゃん、見て見て、海がめっちゃきれい。あっ、島が見える」

窓際に座っている陽菜が、隣の席の誠の手を引っ張る。陽菜にとっては初めての空の旅で見るもの全てが感動になる。一方の誠は、初孫の陽菜に目がない。

「あ、ほんとだ、見える見える。え～っと、何ていう島だったかなぁ？」

「あれはK島。そしてヒナたちは、これから赤い鳥の島まで行くの。じっちゃん、忘れないでよ」

通路側の席の美穂も、身を乗り出して島影を見た。あった。K島の東の端の南側に楕円形の小さな島が見える。あれが兄妹島だ。

K島空港にはセントレアから那覇空港に行き、那覇空港で乗り継いで着いた。予約してあったレンタカーに乗り、ナビを兄妹島大橋にセットした。南国の太陽はやっぱり暑くて

まぶしい。美穂はエアコンを二十二度に設定してサングラスをかけた。海岸沿いの道路を走るので兄妹島が見えたり隠れたりする。島の形の変化が面白い。最初は小島富士だったのに、見る方向で形が変わってゆく。後部座席の陽菜が、見えるもの全てに声を上げている。誠が、それにいちいち応えている。

兄妹島大橋の入口から見る島の形はまるで公園の滑り台のようだった。島の右端に高さ八十メートルのテダ山があって、緩やかなスロープの後は広い平地になっている。その平地に向かって兄妹島大橋は真っ直ぐに伸びている。ところが、大橋は中央部分が高く盛り上がっているので、車は、空に向かって走っているように錯覚する。

「じっちゃん、海がめっちゃきれい。お魚見えるかも」

「見えるかもね。お母さん、車止めて」

「橋の上で駐停車はダメでしょう」

「いいから」

誠の口から初めて聞く高圧的な言葉に美穂は驚き、栄子に言われた〈お父さんの気分転換〉を思い出して素直に従った。美穂が車を止めると、誠と陽菜は車から降り、高欄（こうらん）の格子の間から海を見下ろした。海は、真夏の陽を受けて、波間と波穂で交互にキラキラ光り輝いている。誠は陽菜の目線に合わせてかがんだ。美穂も車を降りた。

「おっ、魚が泳いでいる。ほら、あそこ」

誠が指さす方向を、陽菜は目を凝らして見ている。

「あっ、お魚さん、見える！　お母さん、見て、見て」

美穂も、陽菜の目線で、陽菜の指さす方向を見た。確かに、魚の群れが見えた。

カルロタコは島の中心から少し北西側、テダ山の麓がなだらかになったところにある。そこを南東に五分歩けばンタ池がある。美穂はすでにストリートビューで何度も訪問して

いた。建物はレンガ造り。東面の中央に出入口があって、出入口の左側に大きな窓。出入口の前は広いウッドテラス。屋根は瓦葺で、庇(ひさし)はウッドテラスまで延びている。

レンタカーは指定時間の少し前にカルロタコに着いた。すると、カルロとクララが、ウッドテラスの椅子に腰かけて美穂たちを待っていた。カルロは、つばの広い赤いフェルト帽を被っていた。

美穂たちは車から降り、特に美穂は小走りになって、ウッドテラスのそう高くもない三段の階段を上り、笑顔で椅子から立ち上がったクララとカルロのもとに駆け寄った。

「田村美穂と申します。そして、父と、娘の陽菜です。わざわざお迎えくださってありがとうございます」

「ようこそお越しくださいました。クララです」

「カルロです」

クララとカルロは自己紹介をしながら三人

に握手を求めた。それから、カルロは膝を折って陽菜の目線になり、

「赤い鳥が陽菜ちゃんの来るのを待っていますからね。お食事が終わってからカルロと一緒に行きましょうね」

と陽菜の手を再び優しく握った。

「はい。よろしくお願いします」

陽菜も明るい声でおませに応えた。

さあ、どうぞ、とクララに促されて、赤いドアを開けてお店の中に入った。右手側が厨房。そして、正面の奥の壁は花畑の絵。出入口側の壁はトウモロコシ畑の絵。左奥にも出入口側と同じ大きな窓があって、そこの壁もトウモロコシ畑の絵。壁の絵と窓から見えるトウモロコシ畑が一枚の絵になっている。

「どうぞ、お掛けください」

クララに勧められて窓際の丸テーブルに腰かけた。店には四台の丸テーブルがあって、窓側に二台、奥の壁側に二台配置されていた、テーブルの間には鉢植えが置かれているが、

視界を遮らないように丈は低い。

三人が腰かけると、クララとカルロは厨房に行った。その後ろ姿を見ながら、美穂は、二人の年齢は何歳ぐらいだろうか、と想像した。二人とも、身長は美穂と大体同じで一メートル六十五足らず。体型はふくよかで、歩くときは、二人とも左右の肩をユサユサ揺らしながら歩く。けれども年齢は分からない。七十歳は超えていると思うが、動作にはメリハリがあって若々しいし、肌艶とか血色もとてもいい。不思議だが、二人には年齢を想定させる要素があまりない。その上、日本語が堪能で、ふっくらとした鼻と茶色がかった瞳を見なければ、日本人にしか見えない。

クララがお盆にコップをいくつか載せて厨房から出てきた。

「これは冷たいトウモロコシ茶。それからこれはアトレといってトウモロコシのジュース。一時も過ぎてお腹も空いていると思うけど、アトレは腹持ちがいいから、これで少し我慢

できるわ」

そういうとクララはまた厨房に戻り、今度は一枚のメニュー表を持ってユサユサと体を揺らしながら歩いてきた。

「カルロタコ、食べますか？」

クララが優しい声で三名に聞いた。

「あ、別のメニューにします。メニュー表を見せてください」

美穂はクララからメニュー表を受け取って陽菜と一緒に見ながら注文の品を決めた。それから、誠にメニュー表を見せて、

「お父さんは何にする？」

と聞いた。

すると誠は、メニュー表には目もくれず、

「私には、カルロタコ、ください」

とクララに応えた。

「はい、承知いたしました」

クララは厨房に行って三人の注文の内容をカルロに伝え、また戻ってきた。

「料理はトルティーヤから作るので少し時間をくださいね。それまではアトレを飲みながらおしゃべりしましょう」

クララはそう言うと椅子に腰かけた。そして陽菜に向かって、

「赤い鳥さんも今は森の中でお昼寝中ですからね。お食事を済ませてから、カルロさんと一緒に出かけましょうね」

と優しく声を掛けた。

「クララさんたちはいつからこの島にお住まいですか？」

美穂は誠がカルロタコを注文したことにかなり動揺していたが、冷静を装った。

「ずっと前からですよ」

「お生まれはメキシコですか？」

「そう。メキシコの高原地帯の貧しい村でね、カルロと私は生まれたときから兄と妹みたいに育ったの。ある年、政府と教会の戦争が村にまで飛び火してね、子供たちだけでも逃げて、ということでカルロと一緒にテキサスに

逃げた。そこで、皿洗いから始めてコックになって、数年後、米軍に徴用されて軍用機で米軍基地の島に来た。そして、任期が終わってこの島に渡った」

「どうしてこの島だったんですか？」

「メキシコを離れるとき、親から、これがあればどこの国に行っても飢えることはない、と白いトウモロコシの種を貰っていたの。それでトウモロコシの栽培に一番いいのがこの島だったわけ」

「すると、この島の白いトウモロコシは、全てクララさんが持ってきた種から？」

「トウモロコシは同じ畑で違う品種を育てるといい実ができないの。それで、離れた場所に畑を借りて種を植えて。そして何度も品種改良した。今では、島は白いトウモロコシだけになった。トウモロコシは太陽の光が大好きだから、北風を遮るテダ山があって、一日中太陽の光が降り注ぐこの島は、トウモロコシ栽培に最適なの。……昔はサトウキビ畑が

多かったのに、今ではほとんどがトウモロコシ畑になりましたね」

「以前は三百五十人が住んでいたのに、今では八名で五戸って本当ですか？」

「そうですよ。でも、昼間の人口は十五名ぐらいにはなるかも。畑のお仕事でK島から島の人がまだ来ますからね。家もね、廃屋がまだ十件ほど残っていますよ」

「でも、どうしてそんなことに？」

「兄妹島大橋が出来てK島との往来が便利になって、人口が少しずつ減りだした。それから、決定的な出来事がゴルフ場計画ね」

「ゴルフ場計画？」

「本土の大手ゼネコンがこの島でゴルフ場建設を計画したの。ゴルフ場を造るには百万坪程度の広い土地が必要らしいの。そして、その条件にこの島がぴったりだったそうよ。ゼネコンの計画では、テダ山の麓にホテルを造って、ほかの土地は全てゴルフ場にして、ンタ池も天然のハザードとして活用する。さら

に海岸線も整備して人工ビーチを造る。そうすると、島全体が一大リゾート島になって、日本では初めての、世界でも有数の見事なリゾートアイランドが誕生する。ゼネコンはそんな感じで兄妹島の開発を計画して島民にも公開したのね」

クララはここでトウモロコシ茶を飲んで一息ついた。

「八月の暑い日に、ゼネコンの会社から鈴木課長と若い岡崎社員が島に来てね、四日ほどをかけて、九十戸の家々を一軒一軒訪問して、リゾート化構想の完成予想図を見せながら事業計画を説明した。島の人々は、何にもない島がみんなから注目されるリゾート島になるのかと興奮しましたね。その後からは、鈴木と岡崎は頻繁に来島するようになって、島の人々と仲良くなっていった。そして、年が明けた三月、鈴木たちは土地の買取価格を公開した。その価格が、島の通常農地価格の倍以上、宅地よりも高かった。土地が売れないな

ら借地契約で可能。それに、就職を希望する島の若者は全員雇用して、島に社員寮を造って住んでもらう、という話まで出た。島民は色めき立ってね、ゼネコンの気が変わらないうちに早く契約しようとした。でも、個人個人では契約できないの。鈴木たちの条件は地主全員の一括契約が絶対条件でね」

クララはまたお茶を飲んだ。そして、陽菜に、あっ陽菜ちゃん、お台所のカルロさんのお手伝いをしたらどう？　カルロさんとっても喜ぶと思うよ、と言って、陽菜の手を取って椅子から降ろした。陽菜は喜んでスキップしながら厨房に行った。

「それほど問題のない三軒の保留を除いて、ほとんど全員が合意した。けれども一軒だけはね、与那覇弘（よなはひろし）、ヒデさんというご夫婦は決して同意しなかった。与那覇さんの土地は、ンタ池の周りの雑草地と近くの畑、テダ山の麓の畑で、土地評価としてはそれほどのものではなかった。けれども同意しない。島民は

焦ったけど、鈴木たちはもっと焦った。K島に住んでいる長男夫婦や島の有力者、親戚にもお願いして、みんなで説得に当たったが、与那覇さんご夫婦は誰の説得にも応じない。すると、少し肌寒くなりかけた十月の深夜、与那覇さんの家が火事になって、与那覇さん夫婦は焼死体で発見された。警察の捜査の結果、放火ということが分かって、放火殺人で島の若者が逮捕された。そして、その事件が引き金になって、ゼネコンのリゾート開発計画はなくなった。ところがそれで終わりではなかったの。土地を売ってほかの場所での生活を夢見ていた島の人々からは、島への愛着も消えていた。島への愛着がなければ、もうお仕舞よね。その上、与那覇さんがいなくなればいいと多くの島民は思っていて、そういう人たちは放火殺人の共犯意識がどこかにあって、お互い顔を合わせることが気まずくなった。そして、一人去り二人去りで、そのたびに私たちがサトウキビ畑を譲り受けて、今

の状態になった」

誠は、クララと美穂の会話に割り込むこともなく静かに聞いている。

「悲しいお話ですね。……それで、トウモロコシはクララさんとカルロさんお二人で全て植えられるのですか？」

「トウモロコシは一つの株に二、三の雌穂が出来るけど、いいトウモロコシを作るためには一株に一つの雌穂がいい。それで、必要のない雌穂の摘果をカルロと私の二人でやる。そのほかのことは、K島の農業高校のみなさんに手伝ってもらっている。昔は全て二人でやっていたけどね、こんなに広大になると二人では無理。前の畑だけを最初から最後まで二人でやっているだけ。収穫したトウモロコシは、カルロタコで使ったりみなさんにお分けしたり。でも大部分は商品ですね。メキシコの親戚に送ることもありますよ」

「そうなんですね」

クララが話し終えたところに、厨房のカル

ロから声がかかった。クララは厨房に向かった。その後ろ姿を見ながら、美穂は、陽菜を台所に行かせたクララの気遣いが分かって、クララに感謝した。同時に、一言も口を挟まなかった誠の態度が気になった。

クララとカルロと陽菜が、それぞれ一皿ずつの料理を運んできた。クララはカルロタコ二個が載った皿、カルロはトルティーヤチップスや目玉焼きが見えるチラキレス、陽菜はトスターダス。美穂にとって、タコ以外は初めてのメキシコ料理だった。

今度は、カルロもテーブルについた。

「野菜は全て南側の畑の野菜です」

と、南の窓を指さしながら言った。カルロの言葉に陽菜は南側の窓に走り、靴を脱ぎ椅子に乗って外を見た、

「わー、お花畑もある。お母さん、じっちゃん、めっちゃ広いお花畑」

陽菜は振り返って、手招きしながら大きな声で美穂と誠を誘った。すると、カルロが、

陽菜ちゃん、早くお食事を済ませて赤い鳥を見に行きましょう、と声を掛けた。陽菜は、そうだね、と言いながら駆け足で戻って来てテーブルに付いた。すっかりカルロと仲良くなっている。

「食材はできるだけ自家栽培のものですからね、安心してお上がりください。畑は十分にあるし、お魚も釣れますよ」

「とてもおいしいです」

美穂はカルロの言葉に素直に応えた。味は日本人の好みにアレンジされていた。

「五戸の家族ってどういう方々ですか？」

カルロタコを黙々と食べている誠を気にしながら、美穂はクララに聞いた。

「そうですね……、契約を保留していた三家族と、私たちと、もう一軒は本土の方がご夫婦で移住されています。みんな高齢者でね、中には一人で住んでいる方もいらっしゃる。でも、人間が減った分、鳥やほかの小さな動物が増えました。特に赤い鳥が増えました。

表のウッドテラスは鳥たちの集会場でね、朝と夕は、ンタ池で水浴びをした鳥たちが集まって来て賑やかですよ」

クララの話が途切れたところに、微かな寝息が聞こえてきた。カルロタコをすっかり食べ終えた誠が、椅子にもたれたまま熟睡していた。こんな無防備な状態の父を美穂は今まで見たことがなかった。

カルロが陽菜に声を掛けた。

「お食事が終わったら、赤い鳥を見に行きましょうね。そろそろ赤い鳥がお昼寝からお目覚めしますからね」

陽菜は、うん、笑顔で応えて、トスターダスのアボカドをフォークで口に運び、揚げトルティーヤをカリリと噛んだ。

カルロはつば広の赤いフェルト帽を被り、陽菜を連れて出かけた。美穂とクララは誠を一人寝かせたまま、花畑を見て、ウッドテラスでトウモロコシの葉擦れの音を聞いて、そ

れからテーブルに戻った。椅子に腰かけるとその気配で誠が起きた。

目覚めた誠にクララが声を掛けた。

「岡崎さん、与那覇さんご夫妻には会えましたか？」

えっ？　と美穂は驚いた。どうして父の苗字をクララが知っている？　クララには、田村美穂と陽菜の名前しか紹介していなかったのに。それに、与那覇さん？

「クララさん、ありがとうございます。会えました」

「喜んでいたでしょう？」

「はい、喜んでくださいました。家にも招いていただいて、ヒデさん手作りの野菜炒めとソーメンチャンプルーをご馳走になって、弘さんが釣ってきた魚を刺身にして泡盛を酌み交わしました」

「それは本当に良かった。いろいろありましたけど、与那覇さんご夫妻は、岡崎さんには心を許していましたからね」

状況が呑み込めず動揺している美穂に誠は気づいた。

「あ、美穂。クララさんがさっき話されていた鈴木と一緒に島に来た岡崎というのはお父さんのことだよ」

「えっ、お父さんがゼネコンの社員？」

「そうだよ。名前を挙げれば建築関係者なら誰でも知っているゼネコン会社のデベロッパー部門所属だった。……もう三十年以上も前の事なので、クララさん、私のことなど忘れていると思っていましたが、ちゃんと憶えていてくださった」

「もちろん、ちゃんと憶えていますよ」

クララは笑顔で応えた。

「私は年を取りましたが、クララさんとカルロさんは全然変わっていません」

誠はクララに笑顔で返事し、それから、美穂に向かって語りだした。

「クララさんのお陰で与那覇さんご夫妻に会うことが出来て、お父さんは、三十年余りの

胸の痞(つか)えが取れた。気持ちがすっきりして、今なら事件のことを話せる」

誠はトウモロコシ茶を一口飲んだ。

「入社して三年目だった。リゾート法が成立して、日本では、余暇時代到来と大企業による辺境の地の買い占めが始まった。お父さんの勤めるゼネコンも、デベロッパー部門を立ち上げて、そして、鈴木と私は兄妹島の担当になった。ちょうど前年に兄妹島大橋が開通して、兄妹島は、未開の地に利便性が備わってデベロッパー部門としては魅力的な地になっていた。私たちが初めてこの島に来たのは、今度の旅行と同じ八月だった。車で島をくまなく回った。サトウキビ畑が多かったが、トウモロコシ畑もあって、見事な実をつけたトウモロコシが太陽の光を受けてキラキラ輝いていた。ちょうど出張から帰って数日後にあなたが生まれる予定だったので、その見事に実ったトウモロコシを見ながら、美しい穂があるから立派な実ができる、と、あなたの名

前を『美穂』に決めた」

「この島が私の名前の発祥地なのね」

美穂がまだ動揺が収まらないまま微笑むと、美穂を見てクララも微笑んだ。

「それからは毎月この島に来た。鈴木課長が責任者でお父さんは鈴木課長の指示で動くだけだったが、とにかく、島民を懐柔するために一所懸命だった。それで、島民のほとんどからは内諾が取れたのだが、一か所だけ、与那覇弘さんヒデさん夫婦は決してＯＫしなかった。さっき、陽菜が南の窓から見ていた花畑の右に与那覇さんの家があったが、お父さんは鈴木の指示で何度も訪問した。けれども門前払い、相手にされなかった。

一年が経過して、鈴木課長とお父さんは役員室に呼び出されて中間報告をさせられた。鈴木は島民の内諾書綴りと地勢図を広げ、全て内諾は取りましたが、この一戸だけが保留です。もう少し時間をください、と説明した。しかし、役員は鈴木の説明は聞かない。そし

て、たかが南海の孤島のどうでもいい住民たちの説得もできなくて何が仕事だ。あのくらいの島なら三十億円で買える。当社の売り上げの〇、三パーセントにもならない。君たちはそれぐらいの仕事も出来ないのか。辞表持参で仕事をしろ、とこっぴどく怒鳴られた。責任者の鈴木課長は昇進の話も出ていたときで、かなりショックだったと思う。

翌日、私たちは兄妹島に入った。そして、鈴木は、いつもならK島の居酒屋に若者数人を呼んで振舞うのに、あの日は外間（ほかま）という名前の、二人の間では〈一途な感じ〉と評価していた若者だけを呼んだ。大橋が開通してK島の飲み屋街までは車なら二十分ほどで行けるようになり、兄妹島の若者にとってはK島で飲むのがステータスになっていた。鈴木は、兄妹島の若者たちをそのK島の飲み屋でタクシーの送り迎え付きで頻繁に接待していた。が、あの日は外間だけだった。

私たちは外間を個室に案内した。テーブル

に三、四の小料理が並んだところで、鈴木は瓶ビールを外間のグラスに注ぎ、『外間君が一番の頼りだ。君が積極的に動いてくれたおかげでほとんどまとまった。ありがとう』と言って乾杯した。そしてこれまでの苦労話を和やかに語り合った。その話題が切れたところで、鈴木は、『これからもよろしく頼む』と銀行名が印刷された封筒を外間の前に差し出した。たぶん封筒の厚さからして札束だったと思う。外間は驚いた顔になった。鈴木は、その顔は見ないようにして自分のグラスにビールを注ぎ、それから外間のグラスにビールを注いだ。そして、『あとは与那覇のじいちゃんとばあちゃんだ。あの二人が島を出てくれたら万々歳だ。K島に住んでいる長男夫婦は一緒に住みたいと言っているし、家が火事にでもなれば島を出るだろうなぁ』と、鈴木は他人事のように言って、また外間のグラスにビールを注ぎ、『わしの頼りは君だけだ。この事業の成功も島の将来も君にかかっている。こ

れからもよろしく頼む』と、テーブルの上の封筒を外間の方に押した。それからまたたわいない話で場を繋ぎ、いつもなら酩酊まで行くが、その日はほろ酔い気分のところで切り上げた。

翌朝、ホテルで朝食を摂っているとテレビから〈兄妹島で民家全焼。老夫婦焼死体で発見〉という緊迫したアナウンスと、焼け崩れた家屋の映像が流れた。前夜の事があって箸が止まった。しばらくして鈴木が、『わしは会社に戻るからチケットの手配をしてくれ。君はわしを空港に送った後兄妹島に様子を見に行け。そしてしばらくここに残れ』と周囲に目を配りながら抑えた声で言った。

鈴木を空港に送った後兄妹島に行った。しかし、現場に向かう道には警官が立っていて入れなかった。翌日の昼、放火と殺人の容疑で外間が逮捕されたニュースが流れた。懸念していたことが起こってしまった。お父さんはまた現場に行った。警察の包囲は解かれて

いて、島民数名にも出会ったが、みんなお父さんの顔を見ると避けた。現場に着くと、焼け焦げた柱が無造作に重なり、ヒデさんが丹精込めた花畑も踏み荒らされて、その中に二、三の花が必死に咲いていた。

お父さんは踏み荒らされた花畑に立ってヒデさんと弘さんのことを思った。ある日訪ねたら、弘さんは漁に出ていて、ヒデさんが花畑の手入れをしていた。ヒデさんは、『花が一所懸命咲いているから、ミツバチや蝶が花粉を運んで次の代に繋げる。花には、一所懸命が大事といつも教えられます』と話してくれた。別の日には弘さんが外で立ち話してくれた。『岡崎君、何度来ても駄目は駄目だよ。鈴木君が言うには、ンタ池周辺の土地など二束三文にもならないと言うが、しかし、土地の価値は人間の都合で決めるものではない』と話された。お父さんにも、どうして弘さんがンタ池の土地にこだわるのが分からなかったが、問うこともしなかった。

お父さんはつくづくこの仕事が嫌になった。お父さんたちがこの島に入らなければ、あるいは、お父さんが鈴木の魂胆を分かっていたら、こんな事件は起こらなかった。慙愧（ざんき）の念を抱きながらお父さんは残った花の周りを整理した。すると、ピューピュロピュロと鳥の鳴き声が後ろからした。振り返ると、焼け焦げた柱に二羽の赤い鳥が止まっていた。そしてまた、ピューピュロピュロと鳴いた。与那覇さんご夫妻を悼（いた）んでいるのか、お父さんに何かを伝えようとしているのか、悲しげな鳴き声だった。

鈴木は放火殺人の教唆犯（きょうさはん）になることを心配していたが、外間の犯行は、酔った勢いでの単独の犯行になった。K島の居酒屋でお父さんたちと飲んだのは取り調べで分かったが、鈴木はこれまでに何度も島の若者をK島で接待していたので、今回も同類の事として特に問題にはならなかった」

「でも、どうして会社はゴルフ場建設を止め

たの？」

「与那覇さんが亡くなって会社はある意味喜んだ。が、マスコミが、ゴルフ場開発がらみの放火殺人事件と大々的に報道した。デベロッパーがらみの似たような事件は他県でもいろいろあって、本土のマスコミも問題にした。デベロッパーの闇、という週刊誌のシリーズ物も出て、会社は、兄妹島の計画を強行するのは得策ではないと判断した。そして、兄妹島開発からすぱっと手を引いた。投資した資金は世間的には莫大でも、会社にとってはそれほどの損失ではなかった」

「そうだったんだ……」

「鈴木は、事件以降一度も兄妹島に入ることはなかった。しばらくすると長期の年休を行使して休んだ。お父さんは事業撤退の後始末に関わり、それらを全て終えて会社を辞めた。そして、花卉造園業に転じた」

「岡崎さんはよく頑張りましたよ。だから、与那覇弘さんもヒデさんも、喜んでお会いし

たと思いますよ」

クララは優しく労わった。

「ヒデさんは私に、岡崎さん、花卉園をしっかり頑張ってくださいね、と激励してくださいました。涙が止まりませんでした」

「弘さんもヒデさんも、岡崎さんに会ってとっても喜んだんですね」

「しかし、娘の美穂には迷惑をかけてしまいました」

「どうしてですか？」

クララの問いかけは穏やかで優しい。

「私は、自分の都合で花卉造園業を始めて、与那覇さんご夫妻の供養の気持ちもあって、仕事に没頭してしまい、娘と遊ぶ時間を作りませんでした。そのことがずっと負い目になって、今でも、娘には、美穂には悪いことをしたと思っています」

「岡崎さん、お嬢さんは、美穂さんはお父様のことをちゃんと理解していると思いますよ。立派に育って、素敵なお嬢様です」

クララは凛(りん)とした口調で応えた。

カルロと陽菜が手を繋いで帰って来た。クララはこのような話になるのを見通してカルロに陽菜の世話を任せたのだ。美穂はまた、クララの気遣いに感謝した。そして、涙をそっとぬぐって、父への感謝も込めて

「お帰りなさ〜い！　楽しかったぁ？」

とひときわ明るく大きな声で迎えた。

「ねえねえ、お母さん聞いて。カルロさん凄いよ。カルロさんが、ピューピュロピュロと鳥の鳴き声をすると、赤い鳥がたくさん飛んで来るのよ。ピューピュロピュロ。ヒナには出来ない」

陽菜はすぼめた口角を戻しながら続けた。気持ちが高ぶって顔が火照(ほて)っている。

「赤い鳥って、羽もくちばしも爪の先もみんな真っ赤でめちゃめちゃ綺麗よ。お母さんにもじっちゃんにも見せてあげたい」

クララが笑顔で陽菜の両手を優しく握った。

「そうか。そしたら、あと暫くしたら外のウッドテラスに鳥さんたちが集まるから、そのときまで待って見てもらいましょうか」

「うん、いいね」

陽菜も満面の笑みでクララに応えた。

「そうと決まればもう少し時間があるから、岡崎さん、美穂さん、前の畑でトウモロコシを採りに行きましょう。蒸したトウモロコシも美味しいけど、焼きトウモロコシもなかなかなものよ」

クララは誠と美穂に向き直って言った。

「行きましょう」

誠が応え、美穂は頷いた。

「陽菜ちゃんは、カルロさんと一緒に炭で火を起こして、美味しいトウモロコシを食べる準備をしていてちょうだい」

「は～い、分かりました」

陽菜はカルロと目を合わせて応えた。

クララは小さな籠を手に持ってユサユサと歩き、二人はその後に従ってトウモロコシ畑

に入った。

「ヒゲが茶色に縮れているものから、実を握ってみてふっくらと手応え感じるもの、それを収穫するのよ。五、六本でいいね」

クララはそう言うと、手に持っていた籠を美穂に渡した。美穂は、えっ？　という顔をしたが、クララの気遣いを感じて誠と一緒に畑の中に入った。お父さんこれどんな？　ん、ふっくらとしているな。楽しそうな親子の会話にクララは独り微笑んだ。

カルロは七輪に炭火を起こして美穂たちを待っていた。そして、美穂からトウモロコシを受け取ると七輪で焼いた。

「軽く焼くと香ばしいのよ」

焼けたトウモロコシは、カルロからクララ、クララから三名へと手渡された。

「カルロさん、めっちゃ美味しい」

陽菜が、かじったトウモロコシを翳(かざ)してカルロに応えた。

カワセミが来てウッドテラスの餌をついば

んだ。ウッドテラスにはトウモロコシの粉などの餌を撒いてあった。イソヒヨドリ、ルリビタキ、キセキレイ、ジョウビタキ、ヤツガシラ、サンコウチョウと、次から次へと小鳥が飛んできた。いつもなら大声で騒ぎそうな陽菜が、静かに小鳥たちを見ていた。赤い鳥を見に森へ入ったとき、大声をだして鳥たちを驚かさないように、とカルロに教えられたのかもしれない。

「あ、お母さん、来た、来た」

と陽菜が小声でウッドテラスを指さした。

陽菜の指さす方向を見ると、赤い鳥が餌をついばんでいた。めっちゃきれいでしょう、と陽菜が囁き、美穂も、とってもきれい、と応えた。いつの間にか、ウッドテラスは鳥でいっぱいになって、青や黄、白、赤のいくつもの羽の色と、いくつかの鳴き声がウッドテラスの上で自在に飛び交っていた。

カルロが、ピューピュロピュロと鳥の鳴き声をした。すると、赤い鳥たちがカルロと同

じように鳴きながらカルロを囲んだ。数羽は陽菜の膝に止まって陽菜が持っているトウモロコシをついばんだ。美穂はバッグからスマホを取り出してカメラのシャッターを押した。すると、シャッター音を聞いたほかの小鳥たちも陽菜の周りに集まった。陽菜は、ますます得意げな顔になった。

「小鳥たちもみなさんに慣れたようですから、これから記念撮影をしましょうか。カルロ、準備してちょうだい」

クララは美穂のスマホを見て思い出したのか、椅子から立ち上がってユサユサと動きながら椅子を四つ横に並べた。カルロも、ユサユサと歩いて部屋からカメラと三脚を取ってきて、ファインダーを覗きながら構図を決め、セルフタイマーにセットした。美穂も、スマホに三脚を付けて、カルロのカメラと並べてセルフタイマーにセットした。

「陽菜ちゃんはカルロさんとクララのこの膝に座って。クッションがとても効いていて最

高の座り心地ですよ。そして、岡崎さんはカルロの隣、美穂さんは私の隣ね」

カルロとクララが座り、二人の片方ずつの膝に陽菜が座った。陽菜が、わー気持ちいい、と言って笑いを誘った。誠がカルロの隣に座ったところで、美穂が、両方のカメラのセルフタイマーのボタンを押して、クララの隣に座った。カルロが、ピューピュロピュロと鳥の鳴き声をすると、赤い鳥たちがまた集まって来て陽菜の膝にも乗った。

カシャッ！　カシャッ！

撮影が終わると、クララは陽菜の手を引いて、鳥さんたちと遊びましょう、と鳥たちの中に入った。数羽が、二人の後ろをチョコチョコついて歩いた。

「カルロさん、赤いフェルト帽って珍しい。赤い鳥の色ですよね」

美穂がカルロの帽子を見ながら言った。

「あ、美穂さん、カルロはメキシコ人でコックだから、被るならソンブレロかコック帽だ

と言いたいんでしょう？」

「いいえ、とっても良くお似合いです」

美穂は笑いながら応えた。クラウンのトップが丸くなったつば広の赤いフェルト帽は、カルロに本当に良く似合っていた。

「大橋が開通した年の夏でした。赤い鳥の減少を心配した一人の若者が島に来ましてね。彼はテダ山にテントを張り、赤い鳥の生態を観察しながら、赤い鳥の繁殖の環境づくりを始めました。それを知った与那覇さんは、空いている部屋を彼に宛がいました」

「見ず知らずの方に？」

美穂が聞いた。

「そうなんです。彼の一途な行動に与那覇さんは感動して惜しみなく援助しました。大学一年生だった彼は、それからは休みのたびに来島して、ンタ池を浚（さら）ってザリガニやカエルなどが住めるようにし、周辺にはススキを植えて草原にしてキリギリスやバッタなどの住処（すみか）にしました。また、赤い鳥はキツツキの

ように木に穴を掘って巣を作るのですが、嘴（くちばし）が柔らかいので枯れ木でなければ巣がつくれません。それで、テダ山の至る所に営巣（えいそう）用の枯れ木を立てました。つまり、彼は、餌場（えば）と営巣の場を地道につくったのです」

「彼はそれを一人で？」

「そうです。お陰で、赤い鳥は毎年毎年増えてきました。赤い鳥は彼になついていて、与那覇家にもよく遊びに来ていました。もう彼と赤い鳥は一心同体でした」

「一心同体ですか？」

今度は誠が頷きながら呟いた。

「その彼が肌身離さず愛用していたのが、つば広の赤いフェルト帽でした。彼は、赤いフェルト帽を被って、カルロタコにもよく遊びに来ましたよ。……与那覇さんご夫妻が焼死したのは、彼が大学最後の夏休みを過ごして帰った後でした。そして、お墓参りに一度来島してその後は途絶えました。就職して忙しくなったのかもしれません」

「でも、ここにフェルト帽が？」

美穂はカルロを見た。

「今から十年前、突然、彼は奥さんと一緒にやって来ました。愛用の赤いフェルト帽は相変わらずでしたが、げっそり痩せて末期のガンでした。彼の来島を知った赤い鳥たちは、島中で大合唱を起こして彼を迎えました。そして、彼は形見に、帽子を置いて帰りました。すると今年の三月、今度は奥さんが一人で、赤い鳥が見たいとやってきました。彼との思い出を語り、私が被っているフェルト帽に涙を流してくれました。それから数日後、『カルロさんの帽子を新しい帽子に買い替えるよう彼が言っていました』というメッセージを添えてこの帽子が送られてきました」

「カルロさん、私にもその帽子を少し貸してくださいませんか？　改めて、与那覇さんご夫妻とそして彼にお詫びとお礼を言わせてください」

カルロは微笑みながらフェルト帽を誠に被

せた。誠は静かに目を閉じた。

翌日、美穂たちはK島空港を発った。

機窓から身を乗り出すように外を見ていた陽菜が、じっちゃん、見える、見える、と窓の外を指さした。誠も美穂も身を乗り出した。兄妹島がはっきり見えた。

「お母さん、赤い鳥の写真見せて」

美穂はスマホの写真をタップして渡した。陽菜は何か歌いながら楽しそうにドラッグした。そして、いきなり大きな声をだした。

「あ、じっちゃんの肩に赤い鳥が二羽止まっている。……そういえば、カルロさんのお台所には、浅井先生とカルロさんとクララさんの写真もあった。そして、浅井先生の肩には赤い鳥が一羽止まっていた」

美穂は写真を覗いた。誠が解き放された笑顔で写っていた。美穂はもう一度外を見た。薄い雲が白いベールのように幾重にも重なり、島影はもう見えなかった。

〈了〉